

「サン・ルイス・レイ橋」(ソーントン・ワイルダー)

一七一四年の或日、ペルーの名高いサン・ルイス・レイ橋が突如崩落、五人の通行人が死んだ。目撃した修道士ジュニパーはこの椿事に神の攝理の證しを見出すべく、五人の過去を詳細に調べ大部の書物を著した。人間は「偶然に支配されて」生きかつ死んでゆくのか、それとも「ならんらかの計畫に従つて」生きかつ死んでゆくのか、その確たる答へを獲得せんが爲の熱心な努力の結晶だったが、結局、神の計畫の確證は得られず、書物は異端の書と宣告され、自らも火刑に處せられた。

では、墜落して死んだ五名の過去は如何なるものであつたか。まづ、リマに住む侯爵未亡人のドーニア・マリアは生來情愛が強過ぎて、理知的な娘クララと諍ひが絶えなかつたが、クララが嫁いでスペインに行つて了ふと、「吐け口のない愛情」を満すべく娘に必死になつて手紙を書く。が、その一方、彼女は心密かに、人間は皆己れの事だけが大事で「我執といふ鎧」

に身を固めてゐると信じてゐて、自分にしても「娘のために娘を愛してゐるのではなく、自分のために愛してゐる」と思つてゐた。しかし、娘に「愛し返されたい」との夢は捨てられず、「不思議な心の暗闘に責め」られ酒に溺れてゐた處に、孤兒の侍女ペータが己れを育ててくれた尼僧院長に捧げる純粹な愛を知つて心打たれ、「やり直す」決意を固め、身籠つたクララの安産祈願の爲ペータを伴ひアデス山中の神殿に參つた歸途、事故に遭遇したのであつた。

次はリマの尼僧院で育てられた棄兒のエステバンである。彼は雙子のマヌエルとテレパシーや「祕密の言葉」で意思を通じ合つて「一心同體」の毎日を送つてゐたが、二十二歳になつた時、マヌエルが人氣女優に心を奪はれるに至つて、二人の間に龜裂が生じる。が、疎外感に苦しむエステバンを氣遣つて、マヌエルは女を思ひ切ると告げるが、二人の溝は埋らない。そんな折、ふとした事で重傷を負つたマヌエルが、女の事でよくも邪魔してくれなと、激痛の餘り思はず誇張した云ひ方でエステバンを罵つた揚句、三日目に死んで了ふ。エステバンは自責感に苛まれるが、自殺する勇氣もなく、半狂亂で方々を彷徨さまよひ歩き、連れ戻す様尼僧院長に頼まれた人物に説得されて、リマに戻る途次、墜死した。

最後はアングル・ピオとドン・ハイメの二人だが、彼等については最早説明する紙幅がない。

ただ、彼等も挫折や不幸や孤獨を乗越えるべく一步を踏み出さうとした矢先に椿事に遭遇するのであつて、何れにせよ五名はそれぞれに人間ならではの確執に苦しみ、愛憎に悶え、救済の希望を抱きつつ、途中で人生を斷ち切られて了ふ。さういふ五名を載せて橋が落ちたのは「單なる偶然」でしかなかつたのか。ジュニパー修道士は調査を進める裡に「信仰と事實との矛盾は、普通一般に想像されてゐるより」大きいと思ふに至るが、結局、彼はその矛盾を矛盾の儘放置するしかなかつた。作者ワイルダーが戯曲の名作「わが町」で語つてゐる様に、「死を通してしか見えぬもの」、即ち生きてある限り知り得ない事柄が人生には存在するのだ。

一方、事故の後、遺された者達が眞摯に死者への愛を語るのを見て尼僧院長は思ふ、人間には「美しい心を期待していいのだ」、生者の國と死者の國とを「つなぐ橋は愛なのだ」。作者もさう信じたかつた。彼は生涯人生に對する樂觀も悲觀も共に否定しなかつた。何れも人間性の本質に根差してゐるからだが、さういふ古來變らぬ人生の普遍的な在り様を想像出來ぬ輩を、彼は「思ひ出せない」者達と云つて蔑んだ。(松村達雄譯、岩波文庫)